

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381132

研究課題名(和文) インドネシアにおけるグローバル・コンピテンシー育成に関する研究

研究課題名(英文) Education for Glocal Competency in Indonesia

研究代表者

中矢 礼美 (Nakaya, Ayami)

広島大学・国際協力研究科・准教授

研究者番号：70335694

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本論文では、多民族国家であるインドネシアにおいて、民主化・地方分権化による社会変化と教育変化を背景に、地域間や世代間どのような価値志向の違いがあるのかを検討しました。5州6地域を調査地として選択肢、三世代(中学生、大学生、中学生の保護者)に対して、地域、民族、国家アイデンティティおよびグローバル化に対する意識(愛着、貢献意識)についての質問紙調査を行いました。そして、国民形成教育や各地域が抱える課題(宗教・民族抗争、地域開発、都市化)に関連する地域科の教育との関連性を考察しました。

研究成果の概要(英文)：This research examines identity differences between regions and generations in light of social and educational changes resulting from democratization and decentralization in the multiethnic state of Indonesia. In five provinces, a questionnaire survey on regional, ethnic, and national identity and awareness of globalization was administered among three generational cohorts (middle school students, university students, and the parents of middle school students). The survey areas selected were Java (Jakarta, East Java) as the state's political, economic, and social center and Eastern Indonesia (Maluku), which has a history of independence movements in the underdeveloped areas of its geographical surroundings, and West Kalimantan and West Sumatra. These results are examined with effects of Education for fostering National identity and Local subjects which conduct local issues (religious/ethnic conflict, local development and urbanization).

研究分野：比較教育学

キーワード：アイデンティティ カリキュラム グローバル・コンピテンシー 地域科 地域開発

### 1. 研究開始当初の背景

(1)インドネシア社会の近年の民主化と目覚ましい経済発展、それに伴う(あるいはそれを引き起こした)人々の価値観の変容と教育界のドラスティックな改革は非常に注目される。

インドネシアは20年あまりの間に飛躍的な経済発展を経験し、スハルト長期政権の終焉(1987年)後は社会の民主化が進み、人々の価値志向と行動は、独立・国家開発への貢献以上に個人の経済的発展・幸福の追求へと大きく転換しつつある。また世代別に受けてきた教育によっても違いが生じているようである。(現在30代以上の人々は強い国家主義的な教育、20年代の人々は地域主義的な教育や国家体制を分析的に見る教育、10代はグローバル時代を生き抜くコンピテンシーの向上に重視した教育を受けてきている)

(2)これらの教育界の大きな転換について、申請者は20年前から行っている地域科研究、さらにコンピテンシーカリキュラム研究を生かして、包括的にインドネシア教育を明確な分析視点(ナショナル・ローカル・グローバル)から世代間、地域間比較を可能にする。インドネシアでは、90年半ばからは地域で生き抜く力(ローカル・コンピテンシー)の育成が地域科の新設により重視されるようになった。申請者はその地域科の成立発展過程について、全州の傾向とともに各地域でのフィールド調査を通してその特徴と課題について分析してきた。(中矢礼美「インドネシアにおける地域科の成立・展開過程の研究」(博士論文)1998他)。スハルト退陣後90年代末からは、民主化の波に押されて国民アイデンティティ教育の見直し、2004年からはグローバル化が進む時代を生き抜く力の育成が、コンピテンシーを基盤としたカリキュラムによって進められている状況についても研究を行ってきた(中矢礼美「インドネシアにおけるコンピテンシーを基盤とするカリキュラムに関する研究」2007他)。これらを基盤に、新しい人格形成教育科、英語科、インドネシア語、社会科、公民教育などを中心としたグローバルなコンピテンシーがいかに教育されつつあるのか、地方分権化が進むインドネシアにおいて、各地でどのように実施されているのかを明らかにする必要がある。

### 2. 研究の目的

本研究は、インドネシアにおいてグローバル・コンピテンシー(グローバル時代に、国民として、また地域社会の開発の担い手として生き抜く力)がどのように育成されつつあるのかを、経年比較、地域比較調査をもとに解明することを目的とする。

### 3. 研究の方法

<現地調査地>

6地域(ジャカルタ、東ジャワ州マラン、西スマトラ州ムンタウェイ諸島シボラ島およびバダン、西カリマンタン州ポンティアナック、マルク州アンボン)の州教育局、県教育事務所、各都市の大学、各地域の中学校2校<研究範囲>

6地域における州レベルのモデルおよび学校で開発・実施された地域科、社会科、公民科、人格形成教育科の授業計画・教材などの資料収集およびインタビューによる実践状況と課題などの事例収集、20年間を振り返っての変化の意識

6地域における中学校での地域科教育およびグローバル人材育成関連教育活動の参与観察

6地域における中学生(10代)の児童生徒および保護者(30代中)ならびに小学校時代から地域科を受けている大学生(20代)にアンケート調査を行い、それぞれのグローバル意識、国民意識、ローカル意識およびグローバルに生きる実践能力に関する意識・行動調査

<分析フレームワーク>

a. ナショナル・アイデンティティ教育 ナショナル・コンピテンシー(価値志向・行動) 公民教育を中心に、ナショナル・アイデンティティ(国家愛、責任感、貢献意識)の醸成が目指される。そのインプットの違いが結果として、国家(国是パンチャシラ、国史、政治)への帰属意識(愛着・誇り)、国家統合・開発にむけた貢献意欲と具体的行動(国旗掲揚、国歌斉唱、パンチャシラ斉唱、国家に貢献する仕事や活動)にどのように影響しているか。

b. ローカル・アイデンティティ教育 ローカル・コンピテンシー(価値志向・行動) 地域科を中心に、ローカル・アイデンティティ(地域愛、責任感、貢献意識)の醸成が目指されている。そのインプットの違いが結果として、地域社会・文化(郷土史、民族言語・民族の慣習法、地域産業など)への帰属意識(愛着・誇り)と貢献意欲、実際の行動(地域の慣行的活動への参加、地域への貢献する仕事や活動、地域産業への就職)にどのように影響しているか。

c. グローバル・アイデンティティ グローバル・コンピテンシー(価値志向・行動) 社会科、英語を中心にグローバル・アイデンティティ(グローバル社会の一員であること)との自覚、責任感、貢献意識)の醸成が目指される。そのインプットの違いが結果としてアジアや世界への帰属意識(愛着・誇り)、グローバル化へのポジティブな思考(地球市民意識、グローバル経済へのポジティブな思考、グローバル時代の価値観の多様性の受け入れ)と実際の行動(グローバルスタンダードに基づく行動、グローバルな経済・社会活動)にどのように影響しているか。

#### 4. 研究成果

6 地域を並置比較するには至っていないが、地域毎のグローバル・コンピテンシーの価値志向および教育の関連の分析および二地域間比較について分析を行うことができた。

政治・経済・社会的に国家の中心であるジャワ（東ジャワ州）と、地理的周辺の低開発地域で独立運動の歴史を持つ東部インドネシア（マルク州）の比較を行った論文では、以下について明らかにした。東ジャワの中学生と保護者の地域、民族および国家アイデンティティは、マルクの人々よりも高いことが分かった。これは、国家の中心にいる国内の多数派民族の回答として予想される結果であった。しかし、東ジャワの大学生は同地域の異なる世代と比べても、マルクの大学生と比べても、国家アイデンティティが低いことが分かった。これは、彼らが受けたパンチャシラ教育（国家五原則を中心内容とする愛国心を育てる教育）が、スハルト政権終焉直後の影響で非常にネガティブであったことに原因があると考えられる。マルクの人々は、どの世代も国家アイデンティティが比較的低いという結果が出た。これは、いずれの時期においても中央からの教育への影響が弱かったためではないかと推測される。またマルクの中学生と大学生は、保護者世代よりも地域愛着、民族愛着が強いという結果が出た。これは、この地域での抗争（1999-2004）後に積極的に進められてきた、地域を愛し、平和を希求する地域教育の影響ではないかと考えられる。グローバル化についてはマルクの方が全体的にポジティブですが、両地域ともインターネット使用率が高い大学生は、文化への悪影響を心配しているという結果が出た。

そのほか、西カリマンタン州については民族抗争を克服する地域科教育との文脈で、西スマトラ州では地域開発（貢献）意識を高める可能性のある自民族文化を教える地域科教育との関連で分析を行った。

以上の調査では、どのような教育が人々のグローバルコンピテンシー（特に価値志向）に影響を与えたのかは推測の域を出ないが、今後もインタビューや参与観察などで弱点を補いつつ、教育効果の実際を視野に入れたインドネシア教育の理解を進める必要がある。また、価値志向についてはある程度傾向がつかめ、民族アイデンティティとの関係で民族の一員としての行動についても把握はできたが、国民として、グローバル市民としての行動（力）については把握ができなかった。今後の課題として引き続き取り組みたい。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 中矢礼美「インドネシアにおける世代別アイデンティティの様相と教育の影響に関する考察 東ジャワ州とマルク州の比較から」アジア教育学会編『アジア教育』第9巻、2015、51-63。〔査読有〕
2. 中矢礼美「インドネシア・アンボンにおける世代別アイデンティティの特徴と教育に関する考察」『広島大学国際センター紀要』第5号、2015、35-49。〔査読無〕
3. 中矢礼美「インドネシアの高等教育における地域開発のための人材育成 実践教育（KKN）に注目して -」広島大学高等教育研究開発センター『大学論集』第47集、2015。〔査読無〕

〔学会発表〕(計5件)

1. 中矢礼美「グローバル時代における教育を考える - インドネシアにおける才能教育の事例から -」2016年6月26日、日本比較教育学会、大阪大学。
2. Ayami Nakaya, Multicultural Education to Overcome Ethnic Conflict from Global Citizenship Perspective, 17th International Conference on Education Research (ICER), 2016. October 14, Seoul University (Korea).
3. Ayami Nakaya, Social Identity and Local Curriculum in West Sumatra, Indonesia: Towards Local Development, 2016年11月26日、国際開発学会、広島大学。
4. 中矢礼美「インドネシアの学校教育カリキュラムにみる国民形成の変容 「地域」の位置づけの視点から」日本カリキュラム学会第26回大会自由研究発表、2015年7月4日、昭和女子大学。
5. Ayami NAKAYA, Community based curriculum to improve the quality of life the case study of Muatan Lokal in Indonesia, International Conference on Research Innovation and Commercialization for Better Life (UICRIC) 2015, Universitas Negeri Semarang (Indonesia), 2015 Nov. 27.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者  
中矢礼美（Nakaya Ayami）広島大学、国際協  
力研究科・准教授

研究者番号：70335694

(2)研究分担者  
( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：

(4)研究協力者  
( )